

「スフィンクス・ファクター」としての人間：文学 倫理学批評の視点から

任, 潔
浙江大学外国語学院：副研究員

<https://doi.org/10.15017/7181952>

出版情報：九大日文．43, pp.19-31, 2024-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



「スフィンクス・ファクター」 としての人間

——文学倫理学批評の視点から——

任 潔

一、文学倫理学批評の誕生とその背景

人類は倫理を表現するために文字を生み出し、文字によって日常生活と人類自身の倫理に対する理解を記した。そしてテキストが生まれ、最初の文字が誕生した。この点から考えると、時代・国・ジャンルを問わず、すべての文学は倫理的な読みが可能だ、とすることができると言える。

倫理批評（倫理の視点から文学を分析すること）の歴史は、古代ギリシャにまで遡ることができる。二十世紀六十年代に入ると、倫理批評は民権運動、反戦運動、学生運動、女性解放運動、環境保護運動などの高まりとともに一つのピークを迎えた。批評の倫理性を強調するフェミニズム批評、新歴史主義批評や文化批評、中でもウエーン・C・ブース (Wayne C. Booth) 氏が推進したアメリカの倫理批評が盛んに行われていた。九十年代に入ると、倫理批評の勢いが急速に衰えていき、リチャード・A・

ポズナー (Richard A. Posner) 氏が述べたように、衰退の理由は、西洋の倫理批評に独自の用語と理論上の特徴がなく、方法論として文学倫理学から独立できなかったためである。

中国における文学批評は、西洋の文学理論から強い影響を受けている。改革开放政策が実施されて以来、中国の文学研究は西洋の文学理論と批評方法を取り入れ、外来の文学理論との共存を図る積極的な姿勢を見せている。中国で使われている主な西洋文学理論と批評方法は、概ね、三つのグループに分類できる。①形式を強調する形式批評、②文化と権利の関係、文化とイデオロギー・覇権主義の関係などを中心とする文化批評、③フェミニズム批評、環境批評、新歴史主義批評、ポストコロニアル批評など政治、社会の視点から展開する文学批評である。しかし、これらの文学批評は政治、道徳、性別、種族といった角度から研究を進めようとしているが、結局それぞれの出发点——形式、文化、性別、環境などに行き戻ってしまう、次第に倫理の問題から遠くなっているというのである。

さらに、中国の文学批評には以下のような特徴が見られる。まずは、文学から離れて、理論コンプレックス (Theoretical Complex)、命題コンプレックス (Preordained Complex)、用語コンプレックス (Term Complex) の傾向が著しいことである。次は、「芸術のための芸術」という文学観に基づいて、倫理的価値よりも文学作品の美的価値を重視していることである。最後は、市場経済の影響で倫理的価値の排斥と、文学作品の商品としての価値を強調する傾向が顕著になっていることである。ヒット・チ

ヤートや定価などが、文学作品の価値を判断する基準になつてきている、というのが現状である。

こうした背景のなかで、二〇〇四年十月、文学倫理学批評が聶珍釗氏によつて提唱された。聶氏は、今までの中国の文学研究に足りない部分を補うために、西洋の文学批評の理論と方法を参照して、中国の伝統的な道德批評をもとに文学批評理論のシステムを作り上げ、先述の諸問題への対応を試みている。聶氏が唱えた文学倫理学批評は、発展していく中国の文学研究の要望に合致するものである。

二〇一二年、習近平主席をはじめとする中国政府は、「中国の夢」という思想を発表した。習主席は、誰しも理想や夢を追い求めるもの、そして中華民族の偉大な復興の実現が近代以降の中華民族のもつとも偉大な夢だと述べている。「中国の夢」とは国家の富強、民族の振興、人民の幸せを実現することである。特に注意すべきは、文学と芸術の復興も「中国の夢」の重要な一部だということである。「中国の夢」を実現させるためには、文学と芸術の役割が重視されなければならない。文学と芸術を通して伝達された真善美の価値観が国民の道德修養を高め、倫理的秩序のある生活にも役立つのである。

現在、文学領域でもっとも際立つた問題は、倫理的配慮と道德的価値の欠如である。習主席によつて唱えられた「中国の夢」は、工業化と享樂主義によつて生じた文学領域の一連の問題にも対応し、中国文学を伝道的な道德価値のもとに復帰させようとする呼びかけである。聶氏によつて提唱された文学倫理

学批評は、習主席の呼びかけに対する学術界からの応答である。しかし、それは単なる政治的な呼びかけに対する応答ではなく、工業化や商業化によつて主導される現代に対する倫理的配慮でもある。この二十数年間、聶氏とそのチームはこの崇高な目標のために努力し続けている。

文学倫理学批評とは、倫理の視点から文学を分析・解釈・鑑賞し、文学の倫理的価値と教化的機能を汲みとる批評方法である。最初から方法論の構築とそれを文学批評に適用することに力を入れており、アメリカの倫理批評とは異なる特徴を示している。そして、西洋の倫理批評をそのまま移植したのではなく、参考の上で革新を行ったものであり、倫理選択 (ethical selection) を基本理論として、「人類文明三段階論」を提起した。それは自然選択 (natural selection)、倫理選択、科学選択 (scientific selection) という三つの段階である。自然選択は人間の形態上の問題を解決し、「我々はどこから来たのか」という問いに答える、倫理選択は人間の本質な問題を解決し、「我々は何者か」という問いに答え、科学選択は人間の科学化の問題を解決し、「我々はどこへ行くのか」という問いに答える。¹⁾「人類文明三段階論」は、文学倫理学批評の人間論であることは明らかである。

周知の通り、日本文学における代表的な作品には、多かれ少なかれ倫理的な要素が含まれている。文学倫理学批評は、西洋の倫理批評や中国の伝統的道德批評と異なる独自の理論を持つており、文学倫理学批評の視点で、日本文学を再考すること

は可能である。人類文明の発展について文学倫理学批評は「人類文明三段階論」を提唱し、新たな見解を出しているため、従来、日本の学术界で盛んに行われた推理小説研究やサイエンス・フィクション研究にも、新風を吹き込むことができるだろう。本論は、「人類文明三段階論」のもっとも重要な用語である「スフィンクス・ファクター」について検討し、日本での「スフィンクスの謎」や『オイディプス王』理解・研究を考慮した上で、「スフィンクス・ファクター」を日本の文学研究に用いる可能性を追い求める。

二、「スフィンクス・ファクター」とは何か⁽²⁾

スフィンクス (Sphinx) は古代ギリシャの神話の中のイメージである。初めは古代エジプトの神話に現れ、紀元前 1600 年頃にギリシャに伝えられた。スフィンクスはテーベへ通じる十字路に座り、通行人に謎かけをする。答えられない場合、その人は殺される。この謎はかなり象徴的である。朝には四本足、昼には二本足、夜には三本足で歩くものは何か。この謎の答えは、人間である。正解できるテーベ人は一人もいなかったが、ついにオイディプスはその答え——人間を言い当てた。スフィンクスは恥ずかしさのあまり崖から身を投げて自殺した。(人間) に関するこの謎は「スフィンクスの謎」と呼ばれ、多くのテーベ人を困らせ、悩ませるものとして描写されているが、現代では謎の難しさより、人間自身を認識させるための重要なヒ

ントを与えるものとして理解されている。

津田淳は著書『人間の森の探究——スフィンクスの謎は解けるのか』では、「人間に本性はあるか」、「人間とその社会」、「宗教体験の構造」という三つの角度からスフィンクスの謎について論じ、猿が森を失い、直立による手と脳の発達で『自由』を獲得した人間は、英知と無知、尊厳と卑劣の間に引き裂かれた自己矛盾的な存在であると主張している⁽³⁾。文学倫理学批評の理論は、津田氏の説と類似している。

文学倫理学批評では、アポロンの神殿に刻まれた意味深い言葉「汝自身を知れ」から、古代ギリシャの神話に出てきた人獣一体の怪物は、ちょうど人間が猿から進化してきたということとを芸術的に表したものであり、人間が自然選択を終えたあとの最初の姿である。生物的选择を終えて未開の状態から脱したばかりの古代人にとって、これはまだ解決されていない問題であった。スフィンクスは助成の頭を持つている。この点から見れば、彼女は人間で女である。一方、ライオンの体を持つ点から見れば、彼女は人間ではなく獣である。彼女の体についている蛇の形をした尻尾こそ、野獣の淫欲を象徴するものである。では、人間であり獣でもあるスフィンクスは一体何者であろうか。人間なのか、それとも獣なのか——これは、ハムレットの直面していた「To be or not to be」という問いに似ており、理性の萌芽が見られたばかりの、古代ギリシャの人間を大いに困らせた問題でもある。

スフィンクスの謎は、どのように人間を獣から区別するかについての問題である。進化の過程で、人間は自然選択をして人の形を手に入れたのと同時に、自分の体にはまだ獣の特徴、例えば生存本能や生殖本能が残っていることにも気づいた。人間の頭を持っているため、スフィンクスは自分が獣と異なることを知っている。しかし、ライオンの体と蛇の尻尾が象徴する根源的な欲望もまた、彼女に自分が獣と違うないことを感じさせた。外形から見れば、スフィンクスは人間であり獣でもあるゆえ、自分は一人人間なのか、それとも獣なのかということこそ、彼女がもっとも知りたいことだった。〈人間〉に関する謎かけは、人間の存在に対するスフィンクスの困惑をはっきりと表出している。これが、スフィンクスの謎が誕生した理由である。

スフィンクスが出した謎は、人間が己を認知しようとする歴史的な問題を象徴している。ところが、自分自身を認識せよ、ということを示したスフィンクスは、長い間、人々に誤解され誤読されて、人間と敵対する怪物のような存在と見なされていた。では、スフィンクスのイメージはどう理解すべきだろうか。単なる怪物ではなく、古代の人間が自分自身を認識しようとした象徴的な存在として、あるいは人間の本質を理解させるための鍵として考えることはできないだろうか。

スフィンクスの独特な外見は、人間の頭とライオンの体が一つであることを重要な特徴としている。この特徴には、①人

間にとつて、頭は姿・外見上、もっとも重要なものであり、人間の生物的选择の結果だということ、②人間の頭は理性の象徴、つまり長い進化を経て生物的选择をした人間に理性が萌芽したということ、③ライオンの体は、人間が獣から進化したことの証拠、という三つを意味合いが含まれている。スフィンクスのような、獣と完全に分かれていない人間の中には、獣と同様な性質がまだ残っている。文学倫理学批評では、この人・獣の一体化は「スフィンクス・ファクター」(Sphinx factor)と名付けられている。

「スフィンクス・ファクター」は、ヒューマン・ファクター(human factor)とアニマル・ファクター(animal factor)の二つからなっている。この二つのファクターは、人間にとつていずれも不可欠なものであり、両者が有機的に組み合わされていくことで、完全な人間が出来るというわけである。ヒューマン・ファクターは上位ファクターでアニマル・ファクターは下位ファクターであり、前者は後者を支配して、人間を倫理的な存在にしている。

スフィンクス・ファクターは、生物性と理性の角度から人間の基本的な特徴、つまり人間の体に善悪が共存していることを説明するものである。現実の人間も文学の中の人間も、スフィンクス・ファクターの影響を受けている。人は己の理性で獣性を抑制することで、獣ではなく〈人間〉になろうとする存在であり、獣性しか持たない人間はいないし、理性しか持たない人

間もない。聖人や悪魔の類も、人間を善くさせるための手本もしくは戒めとして、極端に理想化され／極悪者に仕立て上げられるものにすぎないのである。文学作品の場合、スフィンクス・ファクターの異なる組み合わせや内容の変化は、作中人物の行動や性格に影響して様々な倫理衝突を起こし、作品の伝える道徳観・価値観にも変化をもたらす。小説人物の複雑な感情や行動を理解するのに、スフィンクス・ファクターは他の文学理論と異なる視点を導入することで役に立つ。

ヒューマン・ファクターすなわち倫理観は、主に人間の頭・脳によって象徴される理性的意志という形で表れている。頭・脳は、野蠻から文明へと進んでいく過程で、人間が行なった生物的选择の結果である。もちろん、人間が生物的な変化を経験したことを外見で示すものではあるが、人間には倫理観が現れた、ということを示すものとしても注目を要する。スフィンクスが人間の頭を持つことは、スフィンクスの体にすでに人間的な特徴、つまりヒューマン・ファクターが存在したことを意味している。人間が野蠻の時代から文明の時代へと進む過程で現れたヒューマン・ファクターは、人間自身の進化を促す要素であり、人間性そのものではなく人間性の〈種〉なのである。ヒューマン・ファクターがなければ、人間が倫理観と人間性を持つ存在となることも、獣から（人間）へ移行することも不可能である。この人間性は、獣から区別される人間の本質的な特徴である。倫理観はその外的表現であり、本当の（人間）であることを示す特徴の一つ——善悪を弁別する能力を意味する。

倫理観なしには、善悪を区別することができない。善悪を分別できなければ、人間は真の人間と言えない。例えば、アダムとイヴはエデンの園で、禁断の果実を食べて善悪を区別できるようになったが、彼らが禁断の果実を食するという決断を下したのは、もともと彼らに倫理観があったからにほかならない。要するに、人間の頭・脳によって象徴されているヒューマン・ファクターがあつてこそ、人間は倫理観で善悪を区別して動物的本能から自分を解放させることができ、倫理的な人間となつたのである。人間の基本的な属性は、善悪を区別する倫理的特性を通して体现されている、ということである。

一方、アニマル・ファクターはヒューマン・ファクターと異なり、進化の過程で残つた動物的な本能であり、人間の中に存在する獣性の部分である。アニマル・ファクターは人間の根本的な欲望と深くつながつており、自然的意志と自由意志との形で現れている。自然的意志はリビドー (libido) の外部的な表現形式であり、自由意志は欲望の外部的な表現形式である。また、アニマル・ファクターは人間の中に存在する非人間的な部分だが、これを獣性と同等してはならない。動物の中にある獣性は、理性でコントロールすることできない、獣にしかない要素であり、獣が人間から区別される本質的な特質でもある。それに対して、アニマル・ファクターは、人間が進化を遂げた後もまだ体に残っている動物的な性質であり、人間が獣から進化したことと、野蠻の状態から離れても動物的な要素を保有していることを証明している。善悪を弁別する能力の有無で人間と獣が

区別され、ヒューマン・ファクターがアニマル・ファクターをコントロールしていることで、人間は理性を持つ（人間）になったのである。人間の持つ最も本質的な特徴は倫理観を持つことであり、倫理観がないと人間は本当の理性的存在になれないため、その意味では、人間は倫理的な存在とも言える。

三、スフィンクス・ファクターとオイディプスの倫理犯罪⁽⁴⁾

ソフォクレスの悲劇『オイディプス王』については、アリストテレスの『詩学』以来、さまざまな解釈がなされてきた。例えば後藤淳東は、『ギリシア人の人間観』オイディプスを手がかりにして⁽⁵⁾で、斬新かつ示唆的な解釈を行っている。

オイディプスは自分の足を見ることでスフィンクスの謎を解いた「人間」である。しかし、怒りによる傲慢さによりその存在規定すなわち「禁忌の輪」である限界措置を視界の外にしたとき、大地に立つ確実な足を端緒とした彼の「知」も崩壊したのである。この悲劇の中にわれわれが読むべき人間の「原型（パラディグマ）」とは、「汝自身を知れ」という格言が説く自己探求による限界認識と、同じく「矩を越えることなかれ」が戒める「知」に驕ることない平静の中で自己を反復探求することであると考えられる。⁽⁶⁾

本論は、文学倫理学批評の「スフィンクス・ファクター」という独自の用語を用いて、これまでの『オイディプス王』理解と異なる視座から作品を考察する。

文学倫理学批評におけるスフィンクスの謎は、人間が自然選択を終えた後に残った、人間になるか獣になるかという倫理的な問題そのものである。生物的选择を経て人間の形を持つようになった人間は、二回目の選択すなわち倫理的選択をしなければならぬ。オイディプスが謎の答えを知っているのは、彼が人間と獣を区別できるからであり、まさに倫理的な選択をした結果だと言える。

『オイディプス王』の中で、ソフォクレスは近親相姦と父親殺しの物語を通して、オイディプスの悲劇的な倫理的選択を語っている。スフィンクスの謎を解いたオイディプスは、何も知らないうちに自分の父親を殺し、テーベの王になって自分の母親と結婚した。その時のオイディプスは、自分の殺した人が自分の父親であること、また結婚相手のイオカステが自分の母親だったことについては何も知らなかった。かつて謎を解き、テーベの人々を苦しみから救ったオイディプスは、知らずに近親相姦と父親殺しの罪を犯したため、テーベに大きな災いを招いた。物語の冒頭でソフォクレスは、由縁も知らない疫病がやってきて、数え切れない人が死んでしまい、都が壊滅され、血の色と同じに真っ赤な波の中に上下に揺れた船のごとき、疫病神に苦しめられてばかりいたと、テーベの凄まじい風景を描写している。この災難の原因を究明するために、オイディプスはク

レオンに依頼して、アポロのピュトー神殿に解決策を求めに行かせた。すると、災いを招いたのは、テーベに先王ライオスを殺した人がいるからで、この穢れを取り除かないと、テーベを災難から救う方法はないとの返答が来た。この後、先王を殺した犯人がほかでもなくオイディプスだったことが明らかとなり、イオカステは自殺し、オイディプスは自ら両目を刺した。なぜオイディプスのライオス殺害は、これほど悲惨な結果をもたらしたのか。オイディプスの犯した近親相姦と父親殺しという恐ろしい罪の物語が、この殺人事件の背後に隠れているからである。

オイディプスの倫理犯罪には、母親との結婚と父親殺しという二つの罪があり、いずれも当時では厳しく禁じられていたことである。父親を殺してしまったことで、オイディプスは間違った結婚をする運命を辿った。この間違った結婚のせいで、女性（イオカステ）とその夫（ライオス）の間にまた夫（オイディプス）が生まれ、母（イオカステ）と息子（オイディプス）の間にまた子供が生まれてしまった。こうして、息子だった人は夫に、母親だった人は妻に、自分の子供だった人は自分の兄弟になるという矛盾が生じる。これは明らかに許されるべきことではなく、オイディプスの父親殺しと母親との婚姻が、「災難」の源や「罪」とされたのも当然のことであろう。

古代社会では、近親相姦は厳しく禁止されていた。生物学的選択をしている間に、親族者同士による性的行為が悪い結果へと至りかねないことを知った人々は、この行為を禁止しなければ

ならないという意識が強くなった。この意識は、社会の発展につれてタブーとなり、定着していく。

タブーは、生殖に対する古代人の素朴な理解であり、人類社会における倫理観念の源である。タブーはトーテムに起源を持っている。古代の諸民族は、動物をトーテムのシンボルとして崇拜するのが一般的だった。この動物のトーテムは、人間の体に残っているアニマル・フアクターの象徴、換言すると人間の生物学的選択に関する記憶であり、この点ではスフィンクスを思わせる。また、同じ親縁関係を持つ人は同じトーテムを持ち、それぞれのトーテムで相手の親縁関係を見分けられるため、トーテムはタブーのシンボルとしても働く。古代の倫理観念の中で出来上がったタブーは、主として近親相姦と親殺しの行為、つまり親縁関係にある者同士、特に親と子供、また兄弟の間で行われる性的行為あるいは殺害行為を禁止している。このタブーが現れる前に、近親相姦と肉親殺しは一般的な現象だったが、自然選択の過程で、これを禁止すべきだと人々は気づき、親族者同士の性的／殺害行為を否定するタブー意識が高まった。倫理選択の段階に入ると、このタブーは単なる意識から、守らなければならない規範となったのである。

道徳の観念がまだ現れていなかった古代の人間社会では、倫理の秩序はタブーによって維持されていた。当時の人間は近親相姦を恐れたあまり、これを厳しく禁止することにした。『オイディプス王』の中で、オイディプスも近親相姦と親殺しを極めて恐れている人物として描写されている。しかし同時に、こ

これらの罪に対するオイディプスの倫理的意識も描かれており、強い倫理的意識のために、彼は自分の罪の深さを誰よりも自覚している。恐怖に陥つたオイディプスが両目を突き刺し、自分を懲罰することを選んだのはそのためである。

オイディプスの悲劇とスフィンクスの謎との関係についても一度確認しよう。スフィンクスの謎を解いた時のオイディプスは理性的な人間であり、善悪を弁別すること、すなわち人間と獣を区別することができる。倫理観念が備わっていることは、オイディプスの理性の印である。倫理観念は、よく倫理禁忌の維持に見られており、オイディプスの悲劇では、父親を殺すことと母親と結婚することをしてはいけないという形で表現されている。それにもかかわらず、オイディプスは父親を殺し、母親と結婚した。このことから、人間が理性を持つようになって、体の中にスフィンクスの姿が開示しているようなアニメル・ファクターが、依然として存在していることが分かる。一方、スフィンクスの人間の頭が象徴している理性的意志はアニメル・ファクターをコントロールできるため、理性的意志を持つことで、人間は人間らしくいられる。オイディプスの場合、理性的意志は、彼の強い倫理的意識にあたる。オイディプスは、父親を殺した犯人が誰であろうと必ず捜し出して、厳しく処罰すると決めた。自分こそ犯人であることを知った後も、彼は己を許すようなことをしなかった。オイディプスの不幸は、人が倫理的選択を終えて野蠻の時代に入り、長い文明化を経てようやく倫理観の持つ（人間）になった過程は、常に悲劇が伴って

いることを物語っている。

四、スフィンクス・ファクターと日中の怪異文学研究

中国の怪異文学といえば、まず明代の小説家・呉承恩の『西遊記』が挙げられる。『西遊記』は江戸時代に日本へ伝来し、それ以来、日本人にも親しまれるようになった。荒唐無稽なファンタジーと思われるが、全体的な構造は極めて論理的にできている。その論理性を解き明かすために、江戸時代以来、日本人は『西遊記』の翻訳、研究と解釈に努めてきた。岡本綺堂、江戸川乱歩、横溝正史、夢野久作、海野十三、久生十蘭、戸川昌子、小野不由美、綾辻行人、京極夏彦など、ミステリーの代表作家はもちろん、四代目鶴屋南北や芥川龍之介など歌舞伎狂言作家と純文学作家、さらに現代の「故人サイト」やゲーム「逆転裁判」シリーズなどのテキストも、多かれ少なかれ怪異の要素が潜んでいる。特に近年では、ミステリージャンルでの「怪異」が著しく増えており、人智の及ばない「非合理」的な存在を対象とする怪談・怪奇幻想・ホラー作品が目立つのである。

理性意志の力で自由意志を制約する、という文学倫理学批評理論の文学的範例の一つは、『西遊記』の中の孫悟空を数えることができる。スフィンクス・ファクター理論の視座から、孫悟空のイメージについて今までと異なる見解を出せるなら、

この理論を用いて、日本の怪異文学、ひいては日本のミステリー小説や近現代日本文化の表象の変容などに、新たな解釈を与えることは可能ではないだろうか。

文学倫理学批評の理論から見ると、孫悟空は明らかに自由意志の体现である。孫悟空のアイデンティティーは、岩から生まれた卵から進化したもの、よく馴けられた石の猿、あるいは松の実を食う猢猻(コロン)、などの呼称によって表されているが、いずれも人間ではないことを示している。倫理と善悪を知らず、倫理的意志など一切持たない存在である。その後、彼は仙人のもとで修行することで、真つ当な人間になる方法、礼儀作法や人間の言葉を習い、心に倫理的意志が芽生えた。仙人は「孫」の字のけものへんを消して、彼の姓を「孫(孫)」と、名を「悟空」として与えた。七十二般の変化術と、雲に乗って空を駆け、筋斗雲の法を会得した孫悟空は、ついに生きるためのスキルをも手に入れ、獣から「人間」になった。

しかし、倫理的选择をしたことのない孫悟空は、まだ理性的意志の欠ける存在だった。彼は自分の意のままに、悪事の限りを尽くした。蟠桃園宴を好きなだけ荒らし、天条(天上の法則)を犯した孫悟空を、天帝は天兵・天将を遣わして捕まえようとしたが、どのような手を使っても暴れる孫悟空を抑えられなかった。天帝は仕方なく釈迦如来に助けを求め、孫悟空を取り押さえて五行山に封印させた。五百年後、孫悟空は三蔵法師に助けられ、その弟子として天竺までの旅を助けることになった。しかし、善悪知らず、叱られても一向に承服しない野蛮な孫悟

空は、すぐ三蔵法師に反発して脱走しようとした。その自由意志を抑制するために、観音菩薩は三蔵法師に緊箍児(金剛圈)を授けて、孫悟空の頭にはめさせた。また、その輪を締めさせる定心真言(緊箍の呪)も授けた。孫悟空が倫理違反の行為に出ると、呪文を唱えるだけでおとなしくさせることができる。孫悟空の頭は、自由意志の象徴であるならば、その頭にはめられた緊箍児は、理性的意志の象徴と言えよう。弟子が自由意志のままに行動し、倫理違反の行為をしようとする、緊箍の呪を唱えて話を無理矢理に聞かせる。三蔵法師はそのような緊箍児と呪文によって、孫悟空の自由意志を抑制しつつ天竺へ旅立った。八十一の難を経て、三蔵法師はついに彼の倫理的选择を終えて、如来より「戦闘勝仏」の名を賜った。三蔵法師を守る功績を認められ仏になった孫悟空は、もはや自分を理性的意志でコントロールできるようになったため、緊箍児も役割を終えて自ら外れたのである。

『西遊記』の孫悟空は、『オイディプス王』の中のスフィンクスとイメージ上、いくつか類似する要素がある。孫悟空は教育を受けたことがないにもかかわらず、高い認知を持っており、智慧を得ようとする意欲もある。その点では、彼の頭(猿の頭)はスフィンクスの頭と似ている。また、孫悟空の体(猿の体)はスフィンクスの体(ライオンの体)と同じく尻尾がついていて、両者ともまだ獣から人間へと進化する途上にあることの裏付けである。数万年の間、猿という動物的存在から脱出した孫悟空に、まだ猿の尻尾がついていることこそ、人間への進化がまだ

終わっていない印と言えよう。この尻尾は、ほかでもなくアニマル・ファクターそのものである。一方、同じく獣でも、孫悟空が人間へと進化する過程が、スフィックスのそれよりかなりの月日を費やしたのはなぜだろうか。孫悟空の猿の頭はヒューマン・ファクターではなく、まだ「人間性」を得ていないことの印でしかないからである。如來は、孫悟空の自由意志を抑えて人間と同じく理性的な存在、つまり彼にヒューマン・ファクターあるいは「人間性」を獲得させるべく、その頭に緊箍児を嵌めた。孫悟空が自由意志に従って行動するたびに緊箍の呪を唱えられ、こうしてその自由意志も、理性の制御を受けるのと同じようにコントロールを受けている。緊箍児の抑制作用が、人間の頭脳をコントロールする理性をそのまま象徴していることは重要なポイントである。ただし、緊箍児は本来、他人から押し付けられたもので、孫悟空が自ら嵌めたものではないため、孫悟空自身が理性的な存在だとは言えない。三蔵法師が緊箍の呪を唱える時だけ孫悟空の理性的意志が現れる、ということである。

三蔵法師は、緊箍児で孫悟空の非理性的意志をコントロールしているが、孫悟空を従わせ、行動させる基準は、三蔵法師自身の倫理・観念によるものにほかならない。両者の間では、三蔵法師は理性的意志、すなわち人間の論理的な思考能力の役割を担っている。俗世の私欲を捨てた三蔵法師は、肉欲を抑える理性的意志の象徴でもある。緊箍の呪を唱えないと、諸悪の根源とも言える猿の頭をコントロールすることも、それを理性的

なものにすることもできないだろう。

また、『西遊記』では、妖怪たちは常に三蔵法師を誘惑し、その肉を食べようとしている。その理由は、三蔵法師の肉を食べると魔性が取り除かれ、不老不死の仙人になると言われているからである。妖怪が三蔵法師の肉を食べること＝理性を吸収することは、元はと言えば理性を獲得することで、妖怪から仙人になるためだったのである。『西遊記』の妖怪には、何千、何百年の修行を経て、ようやく人間の形を持つようになったものが殆どである。自ら進んで、気が遠くなるほど長い苦行をする目的はただ一つ——人間になることだが、彼らは人間の形を手に入れた後、姿だけでは人間にならないこと、結局自分たちは人間と異なる存在でしかないことに気づいた。人間のもつとも本質的なものは理性であることを認識させられた妖怪たちにとって、諸欲から解脱した三蔵法師は理性の象徴であり、人間性そのものとして映ってくる。彼の肉を食べることは、妖怪たちが理性を求め、本当の人間になるための努力である。

『聊齋志異』など中国の怪異小説には、獣が人間になるため、苦しい修行をする描写がよく見られる。修行は、人が自らを磨く方法の一つであり、「悪」を取り除きカタルシスを得ることから自由意志を制御し、高度な人格あるいは「善」に達するための鍛錬である。この「善」は、修行の目標であり結果である。修行を通して、人間は崇高な理想を追い求める過程を経て仙人となり、獣は身心の完全な入れ替わりを実現することができ、獣の修行は莫大な時間を要するため、人間の修行より遥か

に敵しい。修行が終わった暁には最大の幸福が得られるが、「悪」を駆除する過程は想像以上に苦しいものであり、根気がなければ成し遂げられない。一般的には、中国における獣の修行は人間になるという目的を持つ場合が多く、獣（植物を含む）

は長い間修行をした結果、人間の形を得て己の自然的選択を終える。つまり、人間の形を得ることは、獣が修行を通してはじめて果たしたのであり、修行を続けていくことは、人間となるための基本なのである。ただ、獣は倫理的選択をしないため、人間の形を獲得しても本当の人間にはならず、無意識的に獣たる本性をあらわにすることもしばしばある。

最高の境地へと至るために、理想的な（人間）になることは、人間と獣が修行を通して求めようとするものである。獣にとつての修行は、人間となる唯一の方法であり、人間へと進化することでは生物界の頂点に君臨するための手段である。文学の中で、それを最後まで成し遂げた獣は多くないが、それでも彼らは「悪」を駆除し「善」を取り入れ、人間になることを何よりも願っている。西洋文学にも、これと似たような獣の苦行談が存在する。人魚姫がその一例である。スフィンクスと同じく、人魚は美しい女性の頭をしている一方、体にはアニマル・ファクターの現れである魚の尻尾（獣の体の一部分）がついている。アンデルセン童話の中の人魚姫は、人間の王子が好きになつて彼と結婚したかったが、獣は到底人間と異なる存在であるため、彼女の願いは叶えなかった。人間となるために、海の魔女からもらった飲み薬を飲んだ彼女は、魚の尻尾が人間の足になる時

の激しい痛みを耐えなければならなかっただけでなく、言葉まで失ってしまった。人魚姫の物語は、人間であれ獣であれ、（人間）となるには大きな代価を払わなければならないことを示している。

日本文学・中国文学といい西洋文学といい、語り方や内容こそ異なるものの、スフィンクス・ファクターの存在を示す例証は至るところで発見できる。これは、文学作品を理解する際に、スフィンクス・ファクターを用いることの有効性を物語っている。スフィンクス・ファクターは、ヒューマン・ファクターとアニマル・ファクターからなっており、人間の理性的意志と自由意志を通して作用する。ヒューマン・ファクターとアニマル・ファクターのいずれかに重心を置くことによって、作中人物の性格や物語の筋書きが変化する。理性的意志がどのように自由意志を抑制・コントロールするかを分析することも大切だが、道徳の束縛から脱却しようとする非理性的意志の存在も無視してはならない。非理性的意志あるいは自然的意志は、本能から生まれたものではなく、誤った判断や犯罪の欲望から来たものであり、常に感情によって左右される。その意味では、感情に駆け立てられる非道徳的な力であり、理性的意志のコントロールを受けない、いわば逆方向の意志である。人間の倫理意識に浸透する自然的意志が、理性的意志の抑制から離脱して理性的意志と衝突する過程は、文学では様々な形として現れ、作品の倫理的構造をなしている。

倫理選択の過程で、ヒューマン・ファクターとアニマル・フ

アクターによつて構成されるスフィンクス・ファクターは、理性的意志、自由意志と非理性的意志の間に起る倫理的衝突を通して、社会の歴史と人間個性の発展における倫理的選択の重要性を示し、文学作品の基本的な内容と表現の形式を規定している。したがって、文学を読む時にスフィンクス・ファクターに関する分析から着手し、それに基づいて作品への客観的な評価を行った上で、現代の読者はテキストをどう読むべきかという問題の答えを出すために、効果的ではないかと思われる。

最後は、芥川龍之介の『杜子春』を例として、日本の文学研究にスフィンクス・ファクターを取り入れる可能性を提示すること、本論の結びとしたい。

『杜子春』は、同名の中国伝奇小説をベースにした短編小説である。さらに中国の『杜子春』も、玄奘三蔵の『大唐西域記』『婆羅 斯國(ヴァーラーナシー、引用者注) 烈士池及傳説』が原話だとされており、玄奘が伝えたインドの伝承を元に、杜子春という人物が作られたと言われている。貧しい生活をしていた杜子春は、鉄冠子と名乗った仙人の力で金持ちになるが、その仙人の思惑で様々な幻覚と苦痛を見せられ味わわされるという話である。貧乏人―金持ち―貧乏人―仙人と四度も身分を変えた杜子春は、再び貧乏人になる時、これはすべて人間の薄情さのせいだと己を弁護する。しかし、薄情さのせいではないことは、彼の富への欲望や彼の無駄遣いぶり、つまり彼の中に存在するアニマル・ファクターが証明している。再び貧乏になったのは彼自身の持つているアニマル・ファクターのせいだった、

ということである。杜子春はそれに気づかず、「薄情さ」を否定することから「人」を否定することになり、やがて人であることをやめて、仙人になることを選ぶのである。

杜子春の願いを聞き入れ、弟子にした仙人は、「自分が戻るまでは何があつても声を出してはならない」と命じる。それからの杜子春は、どんな苦しい目に遭つても声を出さずに耐え忍びてきた。言いつけを守る杜子春に、次々と試験がやってくる。虎と蛇にも臆せず、神将の脅しにも屈しなかった彼は武器で突き殺されるが、地獄の閻魔大王にすら黙秘を続ける。しかし、地獄で馬に変えられた両親に出会い、鞭でうたれて倒れた母の声を聞いたとき、思わず「お母さん」と叫んでしまう。それまでの苦労は水の泡となり、杜子春は仙人になる資格を失った。しかし、杜子春は人間にとつてもっとも大切なものに気付き、人間らしく正直に生きることを決めた。その「大切なもの」は、①ヒューマン・ファクターとアニマル・ファクターの二種類のファクターが有機的に組み合わされ、それにより完全な人間が構成される。人間にとつては、この二種類のファクターはどちらも不可欠の存在である。②ヒューマン・ファクターは上位ファクターである一方、アニマル・ファクターは下位ファクターである。前者は後者を支配する。これによって人間は倫理観を持った人間になる。すると、「お前はもう仙人にもお金持ちにもなりたいたいと思つていない、では何になりたいのだ？」と尋ねる鉄冠子に対し、杜子春は「これからは人間らしい、正直な暮らしをする」と答える。仙人はその言葉を忘れぬよう諭し、

泰山の麓の一軒家を彼に与えて去っていく。まさに、「汝自身を知れ」——アポロンの神殿に刻まれた意味深い言葉——の答えを悟ったからこそ、人間に戻ることを杜子春は選んだのである。

『杜子春』のほか、上田秋成の『雨月物語』、村上春樹の『海辺のカフカ』や中島敦の『山月記』なども、スフィンクス・フアクターの理論を用いて解釈できる好例であろう。これらの作品についての分析は別稿に譲りたい。

【注記】

1 自然選択の方法は自然進化であり、弱肉強食を法則としている。倫理選択の方法は倫理教誨、つまり倫理を学ぶことで人間になることである。

科学選択の方法は科学技術であり、技術の更新を手段とする。

2 「スフィンクス・フアクター」の概念に関しては、聶珍釗『文学倫理学批評導論』（北京大学出版社、二〇一四年、三六―三九頁）を参照されたい。

3 詳細は津田淳『人間の森の探究——スフィンクスの謎は解けるのか』（川島書店、一九九六年四月）を参照されたい。

4 詳細は前掲注2を参照されたい。

5 後藤淳「ギリシア人の人間観オイディプースを手がかりにして」『東亜大学紀要』20、二〇一四年九月、一頁。

6 『西遊記』は、中国明代の小説家吳承恩（1501-1582）が明代中期に書いた伝奇・神怪通俗小説（全百回）である。唐の僧侶・三蔵法師（中国では「唐僧」「玄奘三蔵」とも呼ばれている）が、妖怪だった弟子たち（孫悟空、猪八戒、沙悟浄）と共に八十一の難を乗り越えて、西天（天竺、現在のインド）への取経に成功した物語である。

【付記】

本論文は、2021-2022 年度中国浙江省高校重大人文社科攻关計画項目「文学倫理学批評の学際的言説システムの構築——脳テクスト理論に基づいて——」（2023QD071）、中国国家社科基金重大项目「当代西方倫理批評文献の整理・翻訳・研究」（19ZDA292）の助成によるものである。

文学倫理学批評理論については、聶珍釗『文学倫理学批評導論』（北京大学出版社、二〇一四年）を参照されたい。なお、本稿における英文、中国語文献の翻訳は、すべて引用者による。

（浙江大学外国语学院副研究員）